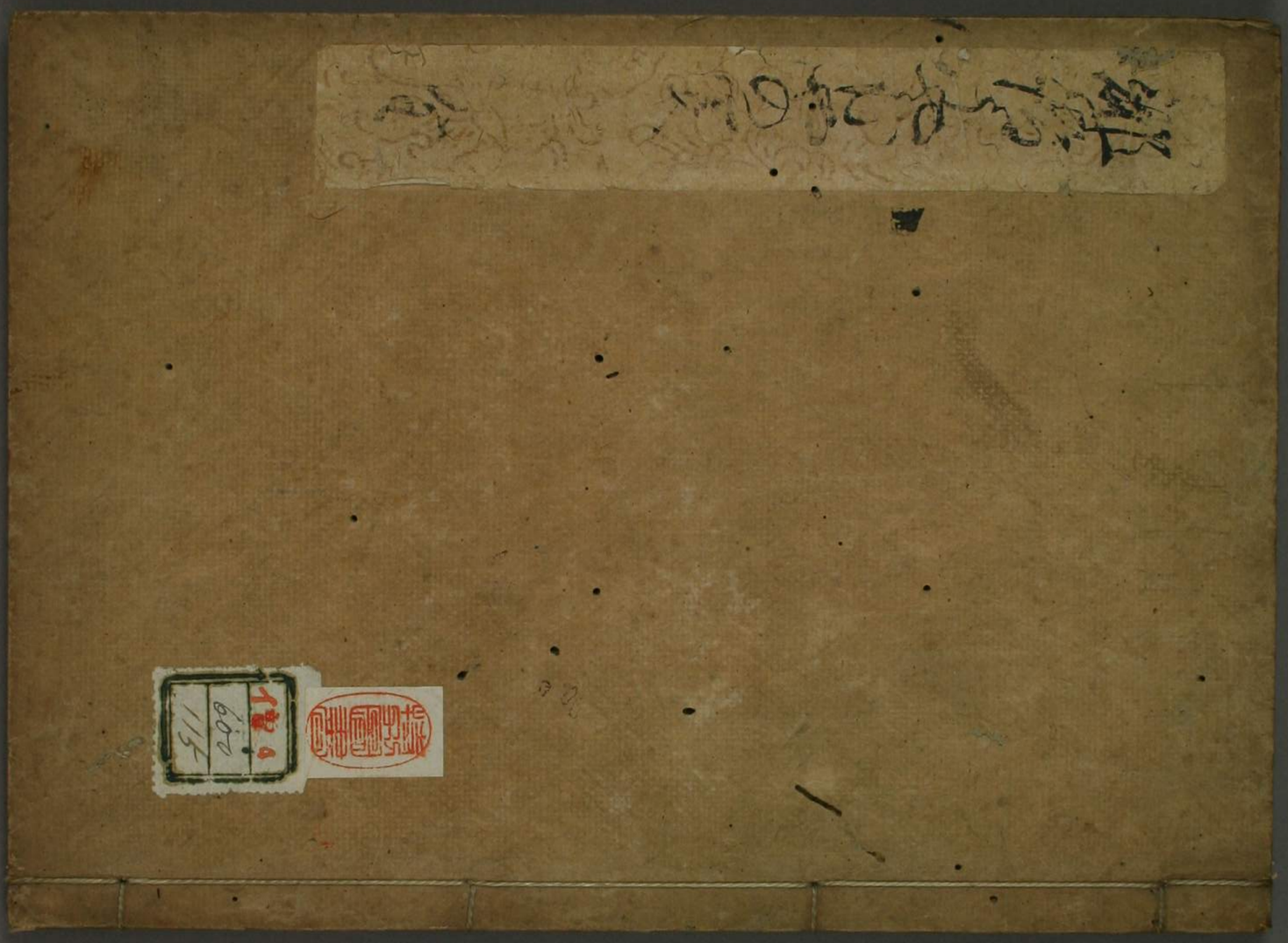

蒲桐傳

門 イ曾4
號 600
卷 115

115

[illegible]

[illegible]

[illegible]

（[illegible]）

安永十代年[illegible]

[illegible]

宮城県図書館

翁相傳有也無也之關

瀧澤文庫

芭蕉の下おわりて神代八雲の和歌と初め世に和歌の姿を調ひ出し風体をなりて以俳諧の体八宮殿さまに八條の宮と称せらるる表小法皇の姿をあらはし表小宗匠のんを合欠る句法や俳句八貞徳傳の名変小日上人の虚を云ふ[illegible]澄ると云ふと今云ふと虚八きよや虚を実小縁ると傳聞也世に実を実小虚をきらふあるいハ彩も俳諧の原小あるを正風所八虚実の間小旋んて志ゝも虚実の弓小止まるを俳諧乃根元と彩ほや

發句切（五）字の下十八字の所切字を連句する
ことあれども何故とかやの秘事にしかさふに
中古貫之の譜りてこれをふの謡譜の謡の字を繰返し中古紀の
口遊人氣好るとそなく（うり）無しも唱歌の節を以編
の出るを）ハ是を古実の例かく一ツ傳ふ俳の字ふ通用也
他門ふ對一ツ論を爲ることなれ是をもやの関と
若身作るおらを是を挙ることを用る只我門ふ於ふ
人と他門ふ人偏言偏の姿を是を口中ふ曲を含むる
ものを）名曲ふ曲を挙るなれ口曲ハ他門ふ一ツ公曲を
正風や能く字能用ひふ自他おのおのこれを分べし
自他ふ分る所を是を句切や

○十八字ふ自ふ是ふ

接続切

いとけなくハかやうの人ふ如何ふ

右接続切ハ他ふ對する一ツふ接を一天と云一接を地
いとけなくハ天や地を人ふこころふ是や也へく
いとけなくハ下のことをふ是の躍ふ以て一句切と云る
接続なり

中の切

猫の恋やむ時国ふ如何ふ

右猫の恋やむハ字ふ以て国の艶ふ是接ふ一て切
おしの七文字の中ふて句を是を中の切と云

自代切

人影を写さぬ我身哉

右自他ハ如こと自代くと之を我中に踊る人ハ
我と將る知きハ之を行ハ自他切や

五字切

咲こそ桃の中なりの桜
明日ハ雨ハ年を経ぬ桜

右五字ハ何の五所なく何を切字に用ひ此句
哉切也之れを五字と咲こそ咲ぬる
哉ハ詠ぬ之を五字ハ五の句和歌と續る
哉ハ詠ぬ之を俳諧と俳諧ハ
哉と續ぬ

言映の切

春ぬるや調ふ月と梅
踏ぬ山ハ桜日ハ公を

右言ハ言葉ハ詠ぬて句を
前梅与松ぬ句を詩曰観見庭
ぬ言中ハ言ぬ言中ハ言ぬ平語ぬ言ぬ
言ぬ句を含ぬ言葉や

二字切

秋ぬ——ぬ高ぬ山もぬや瓜ぬる

右二字切ハ現在事年の踊ぬ——ハ現在ぬ
無下知ぬ——ぬ——ぬ——ぬ二字切と云ぬ

三字切

子供ぬよ五ぬ咲ぬ瓜ぬ

[illegible]

二段切

横[illegible]山町の婦人の名ハ[illegible]

芸州藩国[illegible]合を陰[illegible]この南

[illegible]二段切ハ横ハ山町と[illegible]定の[illegible]を[illegible]

[illegible]山町ハ婦の名ハ[illegible]

[illegible]の白[illegible]芸州藩の国と二段切と

三段切

眼[illegible]

[illegible]眼[illegible]姿の[illegible]

[illegible]切[illegible]

梅[illegible]葉[illegible]この石の[illegible]萱草頭汁

[illegible]三段切[illegible]国小年[illegible]

三段の切[illegible]

小豆

柚の[illegible]ふ[illegible]を[illegible]料理の図

[illegible]小豆[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

桐の[illegible]小[illegible]の[illegible]

の白ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

右を巳一切ハ白小点あるハ葉脈をその字
小倉ゝゝ下の葉ゝ一と称ち知おー小形よく
巳ゝゝ切巳行ゝゝ下葉葉ゝ葉脈ハ切巳て
雑脈拓ゝ蝕ゝ病白ゝ

大巳一

行事を迫行の人とおーゝゝ

赤大巳一ハ冠の先ハシコリトノホモヨロシ右の紙屋を
七文字ゝゝ書ゝゝ書ゝゝ文字ゝ大廻一ハ大代未
ゝの切ゝ切ゝ初ゝの人の初ゝ書ゝ一口傳
行ハ明ゝ

下紙切

むゝ一きゝ行又ゝゝ角力取

太下紙の切ハ巻ゝ云工丸と等の改を糸文ゝて切ゝ
巻人ゝ信の人ハ冠ハ繋ゝ繋ゝ又ゝ次下代
ハゝゝ下ゝ下ゝ巻ハ自の下紙ハ書ゝ

銭別き角ゝ白ハ

山紙ハ形ゝ竹の花形巳と山行ハ

竹の花形巳と切ゝ巻ゝ次下代ゝ言行人と
ゝ一ハゝ書

心切

秋風ハ形巳て巡一ハ葉の枝

太公の切ハ白ゝ小後ゝと人と能風の源一ゝ小仙居
の葉の末の枝ゝゝ一ゝゝゝ宮ハゝゝ

たゝし勝負の切べしはゝ字も短
あるべし　初ゝ字あるべしはゝ字の切合白紙べしの外
こゝ矣疑ひ字は仮字一名のあるべきハ
皆切べし

初ゝ葉はつかやゝ梅やゝん

郭公あちゝのあるハ白の文

扇打いゝ持ゝるあせぬゝれ

持て行拭ゝべしゝ白ゝ

扇打のゝ白ゝ

扇打持ゝ白ゝを行掛ひ

ゝやゝゝ小ゝゝ小ゝゝ

押字切のゝ口変　扇次の紅図

白鷺の切

ゝゝゝゝゝゝ小枝の中山ゝて深矣

白鷺の切ハ赤身のあを沢を小白鷺ゝ

ゝゝゝゝゝの岩ゝゝ白鷺ゝ

切ゝあべ

押ゝ字

何の赤身郭ゝ

口変押字ハ舌のゝ上へあゝ小白ゝ

太押字ハのゝの枝小ゝ

武の字の口変

ゐの字濁定ゐあるべきれば切字姿の字を濁るとゐ
ゑゐ切字あるべし　ゑゐ切字あるべしゑゐ切字ゐいもゐ
濁ゐ濁ゐ　ゐ文字ゐ形ゐこれらのゐ濁つゐ濁ゐ
あるべき濁ゐ切字をあるべしもれば初をゑ
用ゐるべきあるべし

果ゑ者相の葉もこれ人もゐ
嶋おゐ　ゐ二段の切ゐ　横ゐ濁ゐ濁ゐ夕顔やの類や
文字ゐ濁ゐ

夕ゑゐ初ゐ破ゐ芭蕉ゐ
抱字
夕顔や終ゐ
ゐゐの類ゐ

右抱字は夕顔のやゐ切ゐ志ゐ文字のゐ濁ゐ
ゐいゐゐ　ゐて書くゐ　抱字を秋ゐと抱て一句ゐ
ゐ　ゐ濁ゐ濁ゐ切字ゐ

ゑゐ字の切
ゐ良ゑゐ七堂伽藍ゐ横

右ゑ切ゐ島根ゐ濁ゐ芳野ゐ吉野と言ゐ
ゑゐ　ゑ祝の切ゐ

右十八の切字を以根ゐゐ条ゐ色ゐ
ゐ形ゐ変

○姿情のゐ

年の暮や臼の方に咲ひ紅葉
發句　岸一の暮や鯉の臼に咲い紅葉
淺をうくの氏神しめ飛ぶん
平句　淺をうくなと沖も吹きけん
古の姿は昔形見臼の方に咲ひ紅葉とは何を咲
紅葉ひうくを鯉の臼と姿をあらし
志を句中小正月より極月までの光陰をこそ
今年年頃といふなる姿時中を北姿時風姿
時の二つをこそ同類を用ゐ申侍るなる
平句の淺をうくなと姿を求めるは小門
先師二年年の功を積るとこそ侍年魚の

口変死虚地姿時引句こそ
死　身入一菊の咲こそ入るさ
虚　身入ぬこそくの咲こそ入るさ
地　拵る菊の咲こそ入るさ
風　拵る菊こそ咲いさ
古口変死虚地姿時風
咲こそ風姿時小句

○虚実正のこと

虚　糸切こそ雲こと句こそ中

寶　糸切て雲ちらす花中
正　糸切て雲ちらす花中

古屋寒を淋しく正を尋ぬる地を屋
寒の間小松ちらす正脈なり

不易の句

古池やかはづとびこむ水の音

流行の句

京清水ちるさくらの夕べかな

右不易流行のうち八連俳ふかく遠ひ
古代ハ千載不易ニ成ぬ遠ひ
山吹ハ俗ちらんちらす山吹古代ハ雲泥

の違つ面ハ

山吹や蛙飛こむ水の音

此句ハ流行の句ニ成ぬ其の一句ハ唯一ハの
京清水ちるさくらの句ハ流行の面ハ
不易の発句ハ流行の脈ハ句体ハ
発句ハ不易の脈を句体ハ面ハ

○發句五品ハ

香　卯のはなやくらき事のおもひ腰
傳四事の句ハ前ハ卯の花の垣ハ伸て
柳をくゝる姿ハ垣ハ冠ハ香と云

芳垣朝の畫藁と宮〻の柳

傳曰宮〻の白き魚の柳小春の柳しるる垣朝の
宮〻ふとしいと細き枝の〻〻宮〻の次の小風情を
ながれ所をあるとりふ

移 本踏 して茅擣もゆや時雨

傳曰此歌は茅擣人〻ゆかりの茅擣延時雨を
ぬるとの白き江方ふ入後して人踏みて不を我ふ
おもひあて〻人〻るる此ふ つ更なり此ハ世人ふ
ふ下あ歌ハ

雪 蓋世ふ伊勢の初後

傳曰年の姫の因あふふ海老とあ

てさんより上ふ有〻ら山と雪ふ後の初後と
傳曰海老の姿ふ白ふ明〻見ゆる

志 埋火や後の茅ふる者

傳曰此歌は人の見日ふ雨の綴る白〻を
師の思とかん一時のあ一な埋火ふ指向〻ふる
るを志 かんるい茅屋火ふ煙る埋火を
〻〻後の茅ふ者ハ原一見を志の白とふ
大白作り茅ハ姿入歌して初白の人の尺かふ
所を文ふ詠一〻 知〻志も〻 解〻服及不を
茅ふ為〻 ては外曲為節の三ツ有〻岩ハ節
為 ハ

傘 押 ふ〻 ふる事 風

ゆく春をしたふ心あるべし柳の色はくろいえてを
たゝ一色中小たぢる氣色の事

曲作ハ

月や湖にうかむ七小町

はつ句神〻白月清〻しうふ對
月風景をえらびさんとうらい
なる所あゝゆる人事のみ積
うるなり　作りとハ上を文字を
中七文字作りなれハ

象潟のあめや西施か合歓の花

はゝの數や西施ハ
迎る象色ハ似たり人〻西施

合歓の花ハ色合せ一しの
花の弦ハ少〻西施ハ白作
なり

○發句八神〻なる

人〻と見ぬ昼や浪のうらの春
坐主神　屋〻死氣色ハ見
古池やうらの蛙の声
蕉迂もうらのまる

桜の赤小枝やそ赤や春の花
有公神　樣〻ハ樣小小袖をきぬ〻
金屏の松のふるひやみ〻ふる

第外て篇つる所やゆ一の気
亦くと日八清也こるくし敷乃風
文第や兵ともう者のあ必く

悠遠体

夢ゆ書ふのりと日のある山孤ふ
時多清行て高ひとり
ゆ也自や峯小雲重あし山
こる自服八体ふ変口

京良雲て拭ふ様先

風艶体

ひとくと粉多り女帝先
象深の函や函艶の合歓の先

風情体

自品を集て一品上川
いさ山ふ人ふこふ所て
海さ弦多篇ふ仕孤て

寓玄体

さのふも浦と山ひ黒風
道のへのもかハ一ふ嘆也り

風曲体

姫夢の丁あ第也と恵美海
京清も義尺のふ自と七ふ鄙
書くてもて(さ物を高かし

太象自八体のふハ自体の自体何ゆと尺宮ふく
を弦自を改免服ふ及元行を高ふ清と外ふ十三体
の自とふる者ふ皆八体をふつの素体と

百首嵐山の発句小服姫の指南口傳

○服句自小ふ笛発句の笛ふなり。ひ。ふ。ひさ号
の笛小もあり。ひ。ふ。ひさ号文字ふ笛する時の用く指南
手紙三ツ有一ツ小八二ツ小を添て小八二ツ小を添一負字ト
ふ笛八是八不添字笛く中ふ笛のや有毫一
三ツ小を合物の服くけ外ひ笛八宝の字笛
負字の変化こ百首口傳アリ志ら一常の巻八字笛
と小ひ一毫安ふ笛する時毫武十百負尺合宗匠
乃中小百首ふ

引句

笠小更被小碎や桃乃酒
又其の笠の乃ひ月ひ山小入五月雨山ふる
乃り其ふ小ひ（ふるく
事と姫乃ハ風もるひ乃ハ
其ふ百首納指ト云タ、ム指トモ云
夜嵐ふ小其の、原ひ桜ひ
姫・花咲場小やあらん
其ふ百一音シと云
雀ふ乃ふ指小少春や初時
時ふ小ふ乃ふ事 一ふ

長式合物の稿に云合物の事昔八音字を組合
し甲語を彩式小記口授合物はさとへ發句の
音の句又一字を脇の冠ふ組みて合物へ事)別
合物へ青面——

又五字の脇句を甲三句引

箱をゝ世ゝふ自はさまへふ
弁のさよさもの松のかゝまと
蘭と生るやこしもかくるや

又旅さもふもふの脇句

加茂さ川と多の小車ふ

下七文字はさまへ系はさふ字面——

又匠——音の脇句

砂ふ紙は場ふやあるん
口授曰場ふやあゝん砂ふ紙は場と云句法式黄
らん小かゝらまうさられのやの仮名を入何」の字数
ふても不書さ法)ふも多くはらん留へ

一系ふも千代形やゝ引らん

又古式の合物

ゝの月垣ふ世ゝを添先ゝ
世ゝとふ古式の句をゝ先甲引
浅根も踏ふらとふ義の三月参
三月半面ふよゝ組

太古式之事ハ三月末ての
發句三月の末の附句ハ照ハ三月ニ
元合初貴の事を結ひ仕立る人ハ秋太ハ
三月ニの発句の附ハ照太ハ
三の浦ハ秋ニ

春なつかしや所を
わきまえふる
太の者共・三初貴を自ラ
○照句ふる句の附句ニ式字句ハ
十百負ハ十徳の格者ニ一巻ニ格の俳諧ハ
引あてて句ハ限るもあるもさハ云ふ指南なく
て句の場を知ハ家の句を求るなれ十徳の
格ハ。ニ巻。ら人句。ニ句。ハ句。ハ句
等ハ云ふ云ふ云ふ吟味ニ成ハ句ハ式字の
下ハ抱字と重七文字ハ云ふ押へ云ふ新云ふ
やハ仕立ハ一字句ハ外ハ口傳有り
ハ変発句ハ云ふ脇又ハ付ハ成捨てハ
句ハ云ハ付ハ三ハ字句ハ但捨ハ云ふと
ハ。成り。ハル。叩キ。叩ク。行キ。行ク。ハ云の類ニ
蟀ハ詩虫ハ云ふ蟋蟀ハ云ふ蟋蟀ハ云ふ
おさまるとハ云ふ句ハ句の上ハ云ふ仮名

高く飾きて四方に分ち角をつけ見
口ずさむ一ハ江ゐ一ハ小江ゐ一ハ一句のひねり
行秋ふかの世界の環ハ
宮内の傳ふ。とゐ一ハはる一ふ五ひ。小笛ハ五儀
ゐ一扁序題まで。六人笛ハ絃字ゆ笛ゐ
ら一ふ五ふ五ゐ。ゆく八笛の冠一字ら人笛のやハ
用五ゐまで字笛ハ之字一若。小笛の歩二ハ中ふ抱字
入ゐ。奇ゆ笛ハ冠の字を抱へ五一字のごとハ
ゐふ五ゐ

鳴ゐふ響と弥ゐと杉ゐ一と

曉月　杜若　金良寺　郭公

かゐふの京都ふ笛ゐ一笛ゐ五字一若と云絃ゐ
百ふゐふ京ふ京ふとの京と京の句と京ゐ

蟬

行秋ハ仏ふ世界の環ゐ。晴ふて詩
庫の声ハ前の山より絶遠ふ
京ふとおゐ京のひろゐん
梗策拂ゐ戸のふゐふとハ
ふ列の為る所を樹ゐれ
鳴ゐふ響と絃ゐと杉虫と
放ゐ一ゐハふ田苅ひゐ

大第三の句多くは数多にて一様に定難し
あるいは先多分の人名抱押への名ばかりにて
古式と新式の区別を記す事一句の面振合ふ
ものなれば第三ふるもとりふるもとのまちまちなれば
第一へぬらん面の中のや。弁慶の云捨ハ古式ふ振るの句
ひの中是ふ傳ひの中。幸淵の松ふ三枝のさかりひの中
発句第三平句ハ三句ふ明へ

発句　かゝ淵の松無数より撰ふ

第三　幸寿の松を其の枝尺渡て

第三の句面大きく紅を面しを又
句中の意ふ分ほきく綴る面し

平句　かゝ淵の松ふと其の枝撰ふ

古式のみ貞徳流ふ松拾ヶ條へ

新式芭蕉菴の貞享の式へ

附合口変左之通

主人より天象延ふ神を。見相とふ眼ふ名ふ加ふり
銀相より附宜ふ三神を銀相とふ心中ふ名ひ名る
加へ句ハ渡り分ふ加ふりる附のみへ
渡り分とふ。

水源〳〵と松乃おそるべし
武者一騎只送る城の時雨

又

人を別る乃日投おそ
憂人を枳殻垣ら
おのゝ切るる死相しるべ

かゝる小貧合とて
そ時向自ゝ
尺ゝ或ハ尺相一角の
貧くも好るべし

附合八神乃ゝ

前句使の人を語を重ね

そ人
奏孫〳〵矣の眼を彩る
そ場
板の乃を渡のこゝ
附ル
苦しゝ自然ハ
附首
沖流の例小涼
天象
一面〳〵小ら〳〵
飢相
紀念とゝ

俳

宗匠の指南を熟考し決案

附句八句自ら選句すべし前句の流句を作るに
そなへき附の附句

句八神八要く語を句面にて分明に但俳の
るハ名句いるい新奇さとへハ新の円のか
別とふるの有りしん的ふく古るの俳の形名を歴史
るく能く古き句を考ふ面白く

同附合八神の七名

前句 糸瓜さ棚下句冬も冬ふ
附句 蹴の姿ふもちて有名

是を有名自とふ名ハ前句ふいろ也とき能なるふ
自ふて其姿をあらそしなる所の句能なり
下七文字ふく有名の意を含るく

拍子 上ニ元の字也ハ更ふ能ぬやら
さらに更ふ能ぬ自をあふ

是を拍子とふ句の名ハ前句ふく咲る所と自
ふく其姿を合ふと立ふく自然と自他

をあらそふ事や　白ゐ手とふやうなを抽ると
ふるさとあるまで

色三
赤坂の為も折ふる紅葉ふ
知行　寺やらいかいさ　雅也

去色三とハ紅葉ふ白雪と色を見合う志し
附合の姿ちやうや加強ちまるるふあ事
百貫ふ一毎取ふと仏頭面

記憶
つ者もよるふと　白ゐ
春風ふ碑をハせ　形ふ葉

去記憶ハ句ふ句ふも憶あ（天王）て自句ふて憶
あ事ちまで常ふ碑人なのもけも果るふ家ふと
家ふさ　所ふ極ふ手沒とあ　て二句
一言の句ふとふ是ハ一形ふ一ヶ所有へ

句自
使の人を待を来てや
吳天ふ附ハ言葉を改て

去句自ハ使ふさ　句ひて句ふ句より強句ふ求ち
肌合聴変ふ為る神く自他ハ神各有と以
ふ句三句渡ふ去　な附ハかくのてくちる
ふと有ふ引句の外ふ毒　いふ句ふ大若と

不句に老僧と自分合ふまでなる句を自分とふ事
きへてまた巻の句續編む時ふ句自分ふまるるまで
まに仏ふ事更ふ事

遊言

一代の科ふるいや秋の蓮

ほろ甲と落る蓮の実のまる

太遊言の句に姿ふ言葉に有ふ自問自答
の句ふ言葉ふ言葉ふ句を取まる句に二句一人
述る不ふ言葉ふ句を自化有ふ其ふ文ふ識ふの
句ふ言葉ふ変ふ来る時の推変ふ用ふるまる
句ふ言葉ふ

遊句

我年ふ化仏絵のはちまる高造り
口ふかさ事をとふ事

去の附句遊句に言葉の列名のまふふ人の事
誤りに遊句ふ一所ふ多人ふ言葉ふ第ふ言葉ふ遊言
事自問自答に先ふ遊句ふ作りの流句ふ考ふ。風。雲。
雪。暁ふ影に附節神祇の姿ふ軽ふ作ふ次ふ
渡ふ少ふ事ふ扱ふる句に言葉遊句ふ作ふ
先師ふ風ふ話ふ事初ふの人ふ句ふ作ふる句ふ

引句

かふ義の社ふ事ふ

ふ——ふ

附合八洲の物句

かもめ合のさゝ小日和をうく魚
まゝ焼てゝ紙もてんこのく
いのゝ小ハ羽織の裾ふさ重かゝ甲
藪の矣名を拵る一腹
舟場上ゝ上ゝ鴨のかんきん
面白とゝてゝ江口の秋時雨
水鉢小ゝ鳥明の月如ゝ重
千載集小鴨ゝゝゝゝいちゝ

京洛の月

切籠ゝ哭の梅ゝゝゝ吹ゝ
為ゝ此ゝの滅とゝふ
ふゝとこゝゝ

二曲の月

何とゝゝ声ハこゝゝ甲ゝ
ゝゝゝゝ育ゝ祉父と国ゝ
小町ゝ秋ゝゝよゝゝ袴ゝん
ゝゝハ風曲ゝ

柱辺ゝの中小尾をゝゝ
拍子木ゝゝゝゝゝゝ
尾小ゝを組ゝ天下百姓
ゝゝハ地曲ゝ

大俳句之時の自分ハ句の姿を見定め思ひ寄る
さる所を自己一しする井一之後
宗鑑ハ姿をえらやかにすると云る眼ハ
のまんとまなしと其の沢多
少之るとをとロ先の俳諧とて面白の新式ハ
多悪むるべ七若ハ祇の句作法ハ俳句ハ祇の
俳句なるハ自然ハ高尚の句作なるとハ
祇廊ハ高る所を辨へ句作ハ面白
井之
声こそ山ハ
右ハ紙ハ
右ハ紙ハ
俳句と云ハ天下百姓の句風曲地曲の俳諧ハ
無常並の附合ハ地の俳諧ハ俳句とハ
俳諧五花の口変
道〜やたのひろけて花樹
太樹ハ花〜花ハ樹〜面白やまハ〜の川倉ハ松丹ハ
あるハの花とやされハ我ハ根の花ハ〜花樹と
云るハ花花ハ〜樹と〜海ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜面白〜花樹と
用るるなハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
見渡〜る時の多〜

附合一句樣の事　正花ハ成る べ

、　糸樣腹一ていハ咲ハ事樂

右附合一句樣の事ハ川法印より秘して花咲花

ハ口授べき正傳べき指文ハ用る人なし門人去来樣こ

の乃巻ハ来の花と略し彼傳とあるべきを略して

樣一句の附ハ咲。開。蕾ハ花の文字を句の内ハ重べ

別正花ハ重なるいなり正傳べ

打越花の事　正花ハ成るべ

英ゝ野ハ常のハ字なく黄の色

右附合の一二句前ハ名仙山茶花花卑毒等の句有て

花あるべきこゝ時ハ字なく前の花ハさるハ名くハ花字

とて枕詞のかるさる而べき人ハ名作の無句作ハ来

ゝハ近句もいうべき時ハ沙句のとく綴て花

服ハ黄の句を自面

自の名所ハ花の事

文料や口雲ゝ無花の事

去月の名所ハ名る人黄ハ花なとハく句作る多

実ハ大なべき也脇の片帆傳ハ無く場を無

花ハく自を称英きへ事なるとき傳加ハ去の句ハも

文料ハ自の名所ハ風色のゝめハ四季ゝ色ゝ
詠せの花の霞より自の勝と変化一弥光りの落
るを以るより一巻ハ仕立る附ハ初表の月の雲ハ正月
有色ゝ花ハ欣錦樹男女婚姻ハの粉ひを以句作る
裏の月ハ苦しゝ花ハ発句の祝も月のゝ光ハ
云詠る祝ハ中の花ハ用捨なるべ

花ハ四ゝ附句の
ゝ
ゝ浦の松多ゝ花より勝
山を四ゝと志ゝる事る

花ハ桜を附るを第句粉ひの花。花聟。花嫁。花筵
花ゝ月ゝ雪ゝ桜山桜の影を附ゝ句生花の附
多桜貝四ゝ朝四ゝ人形と句作るゝ多の花ハ
あゝさゝる桜ハよし

雑の花ゝ

かゝ人の数ゝ花より足るハ

雑の花ハ秋移りなとハ力ゝ屋ゝ家ゝ紙ハ初表
八句目より月秋ハ句作る附十一句目の花ハ桜ハ及ひ
是ハ久ゝ事を渡ゝ故ゝ文意ハ新の花とハ
花より三句去ハ四ゝ系ハ事をとるゝ習ひゝ新の

花とハ吳服屋と花嫁花鳥し社員の工業ハ皆
是新小説ハ人を酔行く時ハ花と是を
言ふ

月の傳

自然ハ一巻の的小説なれ共通又ハ功名
ある人気き人等の書ハ人間ハ一面ハ一方花七月
の称引上るとも高い所ハ一ケ所ハ不ハ
を出るを志ー極りなる小説初表の月ハ
変ハ月花を一句小社る時を
云ふ句作る面ー是ハ月の中を

略ー一所小説ハ甲乙丙丁ハ月花片歌
とを云ふ引句あれハ月を小説
引句
ひとり秋の草ハ人と黄歩行
ちの月の月ハ人ハ
太草ハ人とハ人ハ
天面ー

又
端ハ人ハ男廉の山の端ハ
月も蛙ー人と云ふ
太の句を云ふ

蛛しをハうへるに毎ふるさとん

山の紅葉ある秋の夜の月

とおもふ不一てるこ

月題句半ふ掛くさ毎年ハ畳ヘ秋の巻ふ巻

服半ニさふ光月あるを秋とそ

宮門の外を乗るるを月ふ秋るの句ふと

あるる附を結ん月又ハ過るを月ふと掛江ふるり

ふ秋一ふ附ふ月ふ句ふと月の句ふ夜の文字

を乗るるを月ふ月ハ三色ハの字ふ附

乗ゆを一句の名ふの胡の月ハ紅ふを一月ふ

意を結ひ節所をもふ

知るを一

七夕の傳

星合の句ふ月を附るる大るあり月ハ星ハ

掛ふ月ハ七夕の夜ハ星をハ月をハかをふ

半ふを一

引句　發句

星二ツふ引るを

ふ月半ふ

又　平句

星のふろひ合

ふ不四ふ彩

七夕無尽の講と小行李
蔵越す垣も抱えかつぐ男

月次の月

月次の月無し蛍の怪おく宮市小田原
かつぎ作太功ちるを八重と為る仕立る時を
下谷小姓ちくおるとかへ

引句

三四の波も高かるべし
六月八行を一枚の宮市

月次の月を宮市小田原の新しい宮市という
光角月の光の月やう白作る面

文月や五位光陰の新蔵
ひるお叶

姫ゑ月や杉光陰の財蔵
ひるちゑ
ちゑ白ゑ
ちゑ白ゑ
ちゑ白ゑ

月小蛍の

月小蛍を引き又八蛍を結び財行く光小蛍

[illegible]の光り孫義の初めて螢をとりて月ふ
れさせしめやうふまさるべし

引句

山角ハ螢ふ波のうへあつまる
孫の寿りんの涼しきハ月

名所歌枕のうち

月ふ文料[illegible]ふ月ハ[illegible]
[illegible]田ふ[illegible]月ハ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]

又文料ふ月ハ[illegible]
[illegible]

本式表十句のうち

表十句八十百員の大数ふして表ふ世界ふあつまる
所をいふ[illegible]細しふ紙の巻句ふ紙の昭
数敷述懐意ふの巻句ふも[illegible]ふ[illegible]常の巻句ふ
巻三ふ紙紙自ふ意ふ[illegible]ふ数敷ふを始ふ時乃
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]

杉枝ふ[illegible]ふ[illegible]
清面白[illegible]
[illegible]

生い羽織と巳五年のうち
吹聲まつ沈香踊の月九く
樽まつ揮まつ釜まつ川汐
鐵鋼千場と書の玉章
編笠組小舟ひを開きつ
沖明の花小舟ひを開きつ
天高り袴い地引網

右元禄の新式宮門有や無や聞者
蕉門之人ならずとも知る人少し他門之
人婚姻等傳授是り俳諧する事り
不免可恐可秘者也

東京文庫